

社交ダンスの社会史ノート (1)

—戦前の日本における社交ダンスの展開—

野 島 正 也

はじめに

これから、私は標題に関するひとまとまりの研究作業を進めていきたい。私は、これまで、権田保之助、米田庄太郎、仲村祥一らの数々の民衆娯楽研究の著作に大いに啓発されてきた。仲村は、「娯楽」を「遊び」や「レジャー」と対比させながら、その、具体的、生活的、主体的性格に注目したうえで、こう約言する。「娯楽には何かをたのしもうという念力がともなう。～からの自由、仕事や世俗からの解放のみでなく、～に向かってよろこびたいという想いが娯楽に人を駆りたてる⁽¹⁾」。

大正期の後半からこんにちまで(とりわけ昭和20年代までは)、社交ダンスは、まさに、そのような「娯楽」の要素をじゅうぶんにそなえたものであったのではないかと、この感想をもったのが、私がこの研究にとりかかる出発点となった。以下では、「娯楽」のもつ複合的な楽しみの全体を明らかにすると同時に、その「娯楽」を支えるために、関連の制度や組織、あるいは下位文化がどのように形成され発展したかを明らかにしたい。

私の社交ダンスへの関心には、もう一つ、私の個人的な経験が影響しているようにおもえる。私事にわたるが、ひととおり記しておく。私は、大学存学中の4年間の課外生活を、大学の部活動の一つであるソーシャル・ダンス部におき平均的なクラブ員の役割をこなした。競技会の選手としては極端に資質に恵まれなかったが、愚直なほどの練習の繰り返しの結果、それでも最終学年で、学生の全国大会で準決勝戦に残ることができた。卒業後、中学校に教員として赴任してからは、アマチュアとして社交ダンスを楽しんだが、小さな競技会で望外の優勝杯をいただいたのを汐に、現役から遠ざかった。

この社交ダンスの経験は、全体としてみれば、一時期社交ダンスに傾斜する者の平均以上のもではなかったが、今回、標題に関する研究をすすめる上で、当面の予備知識の源泉として役に立った。また、競技ダンスの踊り手としての私は、ダンスの動きや形態の美しさを競うことに主な関心があり、ダンス自体を楽しむという態度

をかなりの程度欠いていたようにおもう。私は今回の研究で、第一義的に楽しむために踊られたダンスの複合的な魅力にできるだけ接近したいという希望をもっている。さきの仲村はいう。「しんどく面倒でもある世の中をたのしみ、慰みつつ生きる一人前のおとなの営む生活的な有楽活動が娯楽である⁽²⁾」。日本の社交ダンス史において、この意味の娯楽の特徴を如実に示しているのは、大正から昭和にかけての一時期の「ダンスホール」の文化ではないか、と私は推測している。

ノートの第1章(本稿)のねらいは、戦前の日本における社交ダンスの普及・展開の過程を要約的に示すことにある。つづく第2章では、戦後の社交ダンスの普及・展開を要約する予定である。

日本における社交ダンスの社会史(以下、社交ダンス史と略記)をまとめるにあたってとられる主な視点はつぎの4点である。時代時代の史実の特徴に対応して、そのうちのいずれかの視点に重点をおく。

①欧米のダンスの日本への移入過程、日本国内の大都市地域から地方都市・農村地域への普及過程を、文化接触ないし文化化の視点でとらえる。

②社交ダンスを社会風俗や生活文化の視点でとらえる。

③社交ダンスをアマチュアおよびプロフェッショナルの組織化・制度化の視点でとらえる。

④社交ダンスを学生の部活動や地域青年団などによる

表1 社交ダンスの普及の特徴

	特徴の要点	特 徴	中心点年代
I	社交ダンス文化の移入	主に、政府高官・上層階級による社交的手段。日本の開明に貢献。	明治中期
II	ダンスの複合的 魅力への傾斜	主に、若手中層階級・上位下層階級・文化人によるダンス文化の移入と普及。 通俗のなかの洗練。	大正年間～ 昭和初期
III	通俗化と大衆化	大衆ダンス文化の2層化——性的通俗化と技術の技巧化。競技会の発展。	第二次世界 大戦後こんにちまで

青年文化の一環としてとらえる。

以上の視点を設定した上で、社交ダンス史を、大略、表1のように特徴づける。以下の節では、これらの特徴についてやや詳しく、史実のうらづけをしてみたい。

1 社交ダンスの濫觴

(1)天長節の夜会

記録で知るかぎり、日本で行なわれた社交ダンスは、1882年(明治15)11月3日の天長節の日、井上馨外務卿が官邸で開いた祝賀の夜会ということになる。その時の招待状には「来ル十一月三日天長節ニ付霞ヶ関外務卿官舎ニ於テ夜会相催候条午後九時ヨリ御来臨被下度致希望候也。但シ小礼服、明治十五年十月三十日、井上馨、妻」とある。さらに招待状は当夜踊られるはずの舞踏曲が付されている。曲数は17で、カドリール、ヴァルス、ポルカ、マヅルカ、ギャロップなどである。この夜会から約1年して、鹿鳴館ができるが、この頃、同館でのダンスパーティを見越して、政府の要人がダンスの練習をししばし手がけていたことがうかがわれる⁵⁾。1883年、鹿鳴館落成に先立って、京橋木挽町の明治会堂で政府要人によるダンスパーティーが開かれたという記録があるがその月日・内容等については不詳である。

(2)鹿鳴館時代

1883年(明治16)11月28日、イギリス人建築家J. コンドルの設計による鹿鳴館が東京日比谷内山下町(現在の内幸町)に総工費約14万円をかけて竣工に至った。煉瓦造り2階建てである。その費用の多くは外務省と東京府が負った(同じ頃竣工した外務省本省舎は約4万円だから、鹿鳴館にかけた期待はたいへんなものだったにちがいない)。鹿鳴館竣工を伝えた11月30日の「郵便報知」はこのようすをこう伝えている。「紅葉ふみ分け鳴く鹿の聲聞く秋の晩に際し、恰もよし鹿鳴館の開館あり。午後八時半より嘉賓来集し、須臾にして数百の車馬園中に充滿せり。……既にして奏樂の聲起り、衆賓相携へて楼上の巨室に入り、内外の顯紳貴女交錯して舞踏をなす……」。以後ここで、政府の欧化運動の一環として舞踏会がしばしば開かれることになる。竣工の翌1884年からは、毎週月曜日にダンス教師ヤンソンによりダンスの練習会が開かれ、技術や礼式(エチケット)が教えられた⁶⁾。その年、鹿鳴館の夜会に招待されたフランス海軍大佐・P.ロティ(本名ジュリアン・ヴィオ、1923年没)は、踊っている日本の貴婦人や令嬢たちをこう表現している。「彼女たちはかなり正確に踊る。巴里風の服を着たるがニッポンヌたちは、しかしそれは教え込まれたもので、少しも個性的な独創がなく、ただ自動人形のように踊るだけ……」。彼の冷静な眼から

すれば、彼女たちの動きは、「つり上がった目の微笑、その内側に曲った足、その平べったい鼻」の容姿とともに「異様」そのものであったにちがいない。明治の元勳たちについても、ロティは、燕尾服を「奇妙な格好」に着て「サルによく似ている」と観察している⁶⁾。

鹿鳴館の夜会は大小さまざまな規模でおこなわれたが、とりわけ、1886年11月3日の天長節で井上馨とお武夫人主催の夜会は、皇族、各国大使、大臣等約160名が集まり、盛会をきわめたという⁶⁾。

1880年代の終わりごろになると、鹿鳴館の欧化主義に対する批難が高まり、政府高官たちは、それぞれの自邸で夜会をもつことが多くなった。1887年4月20日、永田町の伊藤博文総理官邸で催された夜会(仮装舞踏会)は盛大をきわめ、招待された約400名の貴顕紳士・淑女は午後9時より翌朝4時頃まで宴を楽しんだ。さらに1888年、条約改正の交渉に失敗し辞任した井上の後を受けた大隈重信外相は、その年に鹿鳴館に約1000人の客を招待し、記録的な大夜会を張ったりした。1889年、明治憲法発布の年、政治的事情で鹿鳴館ダンスは禁止された。これによって鹿鳴館は欧化運動の歴史的使命を終え、1894年(明治27年)に華族会館に払い下げられた。

1923年(大正12)の関東大震災では、鹿鳴館はその大部分が破壊されたが、後に大幅な修理がほどこされて1941年(昭和16)まで存続した。そしてその翌年、鹿鳴館はとりこわされた。鹿鳴館ダンスは、その後、明治の終わりごろまで、外国の賓客のための帝国ホテルに移ったが、しだいに衰退して消えていった。一方、明治末から大正初期にかけてアメリカで発生したフォックストロットなどの新しいダンス文化が日本に上陸しつつあった。

2 社交ダンスの普及

(1)花月園ホール

大正期に入って、とりわけ日本の中産・新興階級の人々が欧米の文化に接触する機会を増していくにつれて、新しい音楽や社交の文化もまたより頻繁に日本に移入されることになる。この時期以降のダンスは「社交ダンス」(Social Dance)とよばれる⁷⁾。大正の初めごろのダンス音楽は、ワンステップ、ツーステップ、ワルツ、フォックストロットなどだった。その頃まだ、ダンス音楽専門の日本人のバンドはなく、ホテル専属の外国人バンドが演奏していた(たとえば、横浜のグランド・ホテルのバンドなど)。1914年(大正3)に日本郵船と東洋汽船の2社が外国航路の船客の娯楽のために、はじめて日本人のバンドを採用し、船中で行なわれるダンスパーティーやティータムにダンス音楽を演奏させた。当時、これらの会社が

バンドマンに支払った報酬は月額にして80円から100円ぐらいで、それはバンドマンの平均的報酬額にくらべて高いほうではなかったが、食事と寝所付で、少し外国にも上陸できたので、同業者で乗船の希望者は多かった⁶⁾。

1917年(大正6)頃、平岡権八郎と夫人・静子はヨーロッパ旅行から帰り、横浜市・鶴見の花月園(食堂)にダンスホールをつくった。これが、日本の営業としてのダンスホールの第1号となった。そこでダンス音楽を担当した井田一郎(ヴァイオリン)は、バンド編成のためにシアトルに行き、楽器や楽譜を購入した⁹⁾。このころダンスホールに来る婦人のほとんどは和服であった。ちなみに男性の場合、正装は燕尾服だったが、それは当時かなり高価なもので、1919年(大正8)で、当時一流と目されていたテラー丸山がつくって1着130円だった。それとの比較で、英国製高紙背広は40円~50円ほどでつくれた。花月園ホールは、外務省や海軍省の外国人接待にも利用され、外国の艦隊が入港すると将兵をここに招待した。

1920年(大正9)には、エリアナ・パブロバが東京の芝田村町の南欧商会という楽器店の2階で、社交ダンスを教えはじめた。ダンスの踊り手についてみると、1919年にアメリカから帰国した影山千万樹(のちに早稲田大学教授)は上手な踊り手になっており、ダンス技術の普及に影響力があつた。池内徳子がアメリカでダンカンにダンスを習って帰国したのもこの頃である。

1921年(大正10年)になると新橋、赤坂、京橋、本郷、神田等に社交ダンスの同好会組織が生まれた。また、社交ダンスの手引書がこのころ出版された(たとえば鈴木四十『社交ダンス』十字屋、1921年)。蓄音器や輸入レコードは、高価で品不足だったが、欧米と交易のある商店をおとして手に入るようになった。また、欧米から帰国した人たちがもってきたレコードやダンスの手引書あるいはダンスの技術は、ダンス愛好者にとってはきわめて関心をよびおこすものだった。平野万里がフランスからもちかえったタンゴ(アルゼンチン・タンゴ)のダンス技術もその一つだった。大正期後半、タンゴは、ごく限られた人々によって踊られるようになった¹⁰⁾。

この当時、日本への社交ダンス文化の導入にあたって、加藤兵次郎(後に寿宏と改名)の役割は少なくない。加藤は、北海道函館の呉服店の長男として生まれた。彼は1917年(大正6)に海外のデパート業界視察のためにアメリカに渡ったが、その船の中で外国人がダンスを楽しんでいるのを見てたいへん感動した。アメリカでは、社交ダンスの教習所に通い、ついでヨーロッパに渡ってから、仏、英、独、のダンス界を広く見学して帰国した。1921年(大正10)に、近代的経営に切りかえた自店の喫

茶部にダンスホールを開設した。しかし、せっかくのこの企画も世間の理解を得られず、批判に抗しきれず、まもなく閉鎖に至った。加藤はその後、東京に転出するが、関東大地震で被災したのを汐に、さらに西下、大阪に出て、ダンスホールの普及に力を尽した。彼の直接手がけたダンスホールである「コテジ」や「ユニオン」は、後に大阪のダンスホールの名門的存在になった¹¹⁾。

(2)「コテジ」から「ユニオン」へ

大阪のダンスホール・コテジの前身、カフェ・コテジが御堂筋にできたのは1920年(大正9)頃だった。その頃そこに客として通っていた一人、写真家・佐方一夫は、当時を回想してこう述べている。

「ダンサーというものも、ダンサーであると同時に女給さんでもあった。ビールのお相手もし、同時に踊りのパトナーでもあった。イーヴニング・ドレスなんでものは知らなかったし、和服姿に白いエプロンを、背で高く結んだパトナーであり、ワンピースが精一杯であった。長方形のホールの両側には白いクロウスをかけた丸テーブルがあり、此处でビールを飲み踊ったものである。勿論バンドなんて気の利いたものもなかった。手廻しのレコードで、フロアはその真ん中、ほんの5、6坪もあつただろうか、ともかく其処が踊り場だった。そんな風だからフロアも完全なものでなかったし、ダンス・チケットもまだ無かつた¹²⁾」。

コテジがカフェからダンス専門のダンスホールに転業したのは1923年(大正12)で、関東大地震の直後だった。フロアの面積は約50坪、ダンサーは、7、8人いた。入場料(アドミッション)は、開設当時50銭だった(ちなみに、ゴールデンバット1箱は6銭、豆腐1丁5銭)。同ホールは、翌1924年夏、加藤兵次郎の発案で、舞踏券を発行し、1枚づつダンサーにわたすという「チケット制」に切りかえ、その後のダンスホールの営業形式に大きな影響を与えた¹³⁾(図1参照)。

コテジの営業上の一応の成功をみて、1924年(大正13)、千日前のカフェ・ユニオンはダンスホールを併設、戒橋北詰のカフェ・パウルスタは、カフェを廃業してダンスホールを開業した。心齋橋筋のバリジャン(南バリジャン)、梅田新道のバリジャン(北のバリジャン)ができたのもこの頃である。こうして、主だったダンスホールだけでも、当時で20ほどになった。玉突き屋の2階やバアの1階といった群小のダンスホールも数えれば、その数倍にもたつた。これらのホールでおどるための費用は、アドミッション制をとっているところでは、1晩1人50銭から1円くらい。チケット制のところでは1回20銭10枚綴りで2円くらいが相場であつたようだ¹⁴⁾。

図1 舞踏券 (1931年当時)



当時の大阪のダンスホールのなかでは、ユニオン・ダンスホールは、施設や音楽演奏の面で優良な部類に属していた。このホールについて、さきの左方は、このような回想している。「バンガロー風の、青だったか白だったか、ペンキ塗りのちゃちな2階建ホールである。燈ともし頃ともなれば玄関口のあたり、一杯の人だかりになり、その人波をかきわけるようにして、踊り客が颯爽と建物の内部に消えてゆくのを、みんなわけもなく見送ったものである⁽¹⁵⁾」。

大正末期には、京都、神戸周辺でもダンスホールやダンス愛好者の組織の発展がみられた。このころ、チャールストーンが小さな流行をみた。タンゴ(コンチネンタル・タンゴ)はまだ一般には踊られていなかった。

3 ダンスホールの規制

(1)ダンスホール禁圧——大阪——

東京は関東大地震による痛手が大きく、ダンスホールやダンス愛好者の組織がようやくもとの活気をとりもどしたのは1924年(大正13)の後半から1925年(大正14)にかけてであった。震災をまぬがれた横浜の花月園ダンスホールやグランドホテルは当時一流のダンスバンドをそろえて盛況を呈し、東京方面から出かけるダンス愛好者の数も多かった。

この頃、東京・横浜周辺ではダンスレコードの普及がみられ、カフェなどでもよく音楽がながされ、店の女給たちの中にも、ダンスをしたい客のパートナー役をつと

める女性が多くなった。市井にダンスが普及するとともに、ダンサーや女給と猥雑なダンスを求める客も多くなっていった。1925年(大正14)5月には、本郷湯島のカフェで、客と女給との「あやしげな」ダンスが警察当局より摘発され、それを機会にカフェや料理店での社交ダンスはいっさい禁止という警視庁特別指令が発せられた⁽¹⁶⁾。

関東大震災の後の社会情勢は、民生の不安定と労働運動の発展、海外の反日・反帝国主義の風潮の高まりなどがみられ、治安維持や国民の「思想善導」のために統制強化の動機づけが高まりつつあった。大正末期のダンス風俗への統制の動きは、警察官僚によってこうした治安上の不安がとりわけ強く意識された結果であるとおわれる。

さて、大阪では、大地震の影響もなく、ダンスホールや市井のダンスパーティーは活況を呈していた。またダンスの大衆化とともに、その俗化もすすんでいった。たとえばその頃流行した「ダンス芸妓」もその一つである。三味線代りに蓄音機とレコードを持参して、座敷で踊りを楽しんだりした。

ダンスホールの風俗について、警察当局はかねがね問題視していたが、1926年(大正15)暮に、規制の方針は一気に強化された。

その年の12月25日の雪の夜、天皇崩御の号外が街にまかれた。ラジオのなかった頃である。大阪の約20のダンスホールにはその日も大勢の客が入っていた。そのあとの事は、ダンスホール・パウリスタに居あわせた左方一夫の体験記を例にしてみることにしよう。

「……ワンステップ、ツーステップでやっている、どやどやどや——と佩剣がちゃつかせて招かざる不粹者一隊の不意の侵入である。例によって例の如く、蛮声張り上げてガクタイやめい！ みんなじっとしとれ！ もとよりこんなことは当時の茶飯事であり、充分慣れ切っているが、それにしても今夜のは何時とも様子が違う。いきなり非国民め！ と来たものだ。非国民め、何をしとるか！ 今上陛下御崩御あらせ給うたというに何たる不謹慎さだ。非国民達、みんな集まれ——と来たから一寸どきんときた」。こうして、客たちは住所・氏名を書かされ、雪道を警察署まで歩かされ、尋問の末、翌日午前2時頃放免になったという⁽¹⁷⁾。

大阪府警察は、ご崩御の際のダンスホールの営業を重大な不謹慎とみた。そして直後にダンスホール取締りの臨時府令を出して厳しい営業条件のもとに取締りをはじめた。その結果、コテジ、ユニオン、パウリスタ、南パリジャン、北パリジャンなどの名だたるダンスホールが1927年(昭和2)までに閉鎖に追いこまれ、以後、大阪

府内のダンスホールは、第二次世界大戦の終結まで復活の機会を失なった。

なぜ、大阪府でのみこのような厳しい禁圧の方針がとられたかについての理由は不明である。瀬川昌久は、この点についてつぎの二つの原因を推測している⁽¹⁸⁾。その1は、右翼団体や内務省のダンス排撃論が根強くあり、それを受けた一部の警察官僚が常々ダンスホール弾圧の機会をうかがっていた。その2は、大阪という土地柄、各種の風俗業者の利害が複雑に入り乱れていて、ダンスホール隆盛の状況に商売上の脅威を感じた料亭や待合が政治家が府当局に圧力をかけていた。

昭和2年以降の大阪で、湊町大国橋の清和会館だけは、会員制のダンスクラブとして踊ることができた。当時、ごく普通のサラリーマンの日給が40～60円だったが、清和会館の1ヵ月の会費は30円だった。それでも踊る場のない大阪では人気があり、毎夜押すな押すなの賑わいだったという。ダンスの曲目は、主に、フォックストロット、エールブルース、ブラックボトム、ワルツで、タンゴはまだ踊られていなかった。

その後1928年(昭和3)から翌年にかけて、大阪に接する兵庫、奈良の県境等にダンスホールが建てられていくなかで、清和会館へのダンス愛好者の足はしだいに遠のいていった。そこで、会館は、臨時会員の制度をつくって、1回づつの臨時会費をその都度払えばよいなどの対策を考えた。しかしそれでも会館は、踊り客に住所・氏名の署名の手続きを義務づけられており、窮屈な印象は免れず、衰退をとめることはできなかった⁽¹⁹⁾。

ダンスホールは、兵庫県の杭瀬、尼ヶ崎、宝塚、奈良県の生駒などにつぎつぎと新設された。その経営者もダンサーもほとんどがかつての大阪のダンスホールに縁のある人々だった。主なダンスホールには、1927年(昭和2)に新装開店した尼ヶ崎ダンスホール、翌年、阪神国道沿いに杭瀬ダンスホール(のちのダンス・タイガー)、1929年には尼ヶ崎キング、西ノ宮にガーデン、西宮、が開店。1931年には、国道長州にダンスパレス、宝塚に宝塚会館と豪華なダンスホールがつぎつぎに竣工した⁽²⁰⁾。

(2) 舞踏場取締規則——東京——

昭和年代に入って、東京では1927年(昭和2)から翌年にかけてチケット制のダンスホールがつぎつぎに開場した。1927年3月、東京駅八重州口の日米信託ビル階上に東京舞踏研究所(のちに日米ダンスホールと改名)、同年5月、人形町に朝日舞踏場が開場。朝日舞踏場は、同年秋、大阪のユニオンが買収してユニオンダンスホールと改名して栄えた。

1928年(昭和3)にはダンスホールが急増した。まず

3月に渋谷百貨店に喜楽館、ついで新宿・白鳥座の跡に国華、5月には青山に青南舞踏場、7月には赤坂溜池に赤坂、四谷にノープル、秋になって日本橋にソシャル、ベニス、バルナス、麻布十番には朝日ができた⁽²¹⁾。こうして、1928年末には東京のダンスホールの数は大小あわせて33に及んだ。この勢いにあわてた警視庁は、1928年(昭和3)11月に急きょ「舞踏場取締規則」を發布し、1929年末までの猶余期間をもうけた上でダンスホールに一定の規則遵守を義務づけた。規則の内容は、周囲からの遮蔽、3階以上の高層建築化などであった。

その結果、従来どおりではほぼそのまま営業を継続できたのは、ユニオンダンスホールと日米ダンスホールの2館のみだった。また、規則に合った建物に移転して営業を継続したのが、京橋に移った国華、新宿日活階上に帝都舞踏場と改名して移ったバルナスである。また、クラブ形式の舞踏場としては芝園倶楽部と耕ちゃん倶楽部(ジャパンと改名)が残った⁽²²⁾。

取締規則發布時に33あったダンスホールは、猶余期間の切れた1930年には6館にしばられた。しかしまた、取締規則發布以後に、九段ダンスホール、飯田橋舞踏場、溜池ダンスホール(のちのフロリダ)が新たに開館した。

取締規則が發布されてからは、婦人のダンス愛好者がダンスホールを敬遠する傾向がでてきて、その分、職業的チケットダンサーの比重が増し、以後、ダンスホールは男性本位の娯楽場としての特色を強めることになった。一方、昭和期に入ってダンス音楽の演奏技術は以前よりも一層高度化し、それらを演出するダンスホールは複合的な娯楽文化の極大点に達した感がある。

4 ダンスホールの全盛期

(1) 「フロリダ」文化

音楽評論家・瀬川昌久は自著の中でこう述べている。「溜池にあったフロリダは、名門中の名門として、格調の高さ、集まるダンスのパトロン(愛好家)の趣味、出演バンドの演奏内容、すべてにおいて群を抜いていた。……また、このホールにかよいつめた当時の学生やインテリ、文化人のなかには、のちに各方面の指導者となったような名士が非常に多い。ハイカラ人士にとって、フロリダは最も華やかな遊び場であり、社交場でもあった⁽²³⁾」。

菊池寛は東京朝日新聞掲載の小説「勝敗」のなかでフロリダを登場させている。すなわち「そこからフロリダまでは、いくらもなかった。狭い階段を上って、二階のホールへ上った。ジャズ、バンドは、作り物のシャコ貝を背景に一段高いところにいた。……」(1931年10月9日)フロリダに限らず、この年代のダンスホールのようすは、

久米正雄、大仏次郎などの作家の作品や日活や大船の映画にしばしば登場する。

フロリダは、昭和4年8月に開場した。はじめの企画者は、鶴見の花月園ホールをつかった平岡権八郎夫妻だった。実際に用地の交渉にあたり、開場までの実務を担ったのは津田又太郎である。フロリダの命名は、社交ダンスの日本への導入に功労のあった目賀田綱美（元男爵⁽²⁴⁾）による。目賀田は、パリー流のダンスホールにあやかって、この名前を推奨した。フロリダの正式名称は「ボールルーム・フロリダ」だが、館名にボールルームを冠したあたりは、津田の見識の高さといえようか。

開場当時のフロリダは質素なたたずまいで、ホールの右側の隅に三角形のステージがあり6人編成のバンドが上がっていた。装飾や茶器は簡素で、駅の待合室にありそうなベンチがところどころにおいてあったくらいである。ダンサーは数名で、客はかなり入っていた⁽²⁵⁾。このころでは、ワルツ、タンゴ、パソドブレなどもよく踊られた。

フロリダの経営は津田に全面的にまかされていた。開場当時からのフロリダの様子を、津田自身の回想によってみることにしよう⁽²⁶⁾。

「(昭和4年8月の開場)当時、音楽団はジョース・ハワイアン・セレナーダスの6人、日本に初めての御目見得、従業員は10名、ホールは90燈の電燈が、格好の取れない極の様な照明器より光を投げ、20余名のダンサーを照して居ったのです。ホールは間じきりが多く、喫茶のカウンターも無く、ポプリンカーテンの蔭で石油コンロに火を灯し、コーヒー十銭と壁に張りつけてありました。しかしステージよりはあの南国的なハワイアンギターから流れ来るハワイ民謡のメロデーは、今だに懐しい思い出の一つとなって居ります。

5年2月からは私の経営方針で進む事になりました。当時、世間はダンスホールと、ダンサーを蔑視し非難して居ったのです。私はその誤解をときたい為、又その真実の姿を知って頂き度く、「ダンスホールに就て」と題するパンフレットを各方面に配布しました。そうしてダンスを一つのスポーツに、洋楽の普及は勿論のこと、朗らかなホールこそ家庭の延長でなくてはならない。又外人誘致ともなって、美しい国際的社交場としてのホールを実現し、ジャズの良否は無論ホールの一隅に至るまでフロリダスタイルをあみ出すべく努力したのであります。

(昭和6年の)10月には社交ダンスの礼儀と世界的標準ステップの紹介を目的とした「フロリダダンシングタイムス」を発行しました。

(翌年の)3月には社交ダンスアマチュア選手権大会を催し、各方面に一大センセーションをなげました。

次いで仏蘭西よりムーランルージュ・タンゴオーケストラの4人を招聘し、夜間は菊地フロリダボーイズ・オーケストラと交替演奏をしました。昼間はコロムビア・オーケストラの演奏となり、日本一流のジャズミュージシャンは当ホールに集まりました。

其の後タンゴオーケストラは非常に好評を博し、JOAK及び各レコードに吹込まれ、東京は勿論全国到るところタンゴメロディーの流行した事は、実に嬉しい事であります。それに次で東京最初の家族デーをフロリダに於て開きました。5月には突然チャップリン兄弟がフロリダを訪問し、歓迎の騒ぎに拍手は鳴り止みません。そうしてチャーリーは、ナンバーワンのチェリーと踊り、スクリーンならでは見られぬ喜劇王の風貌を目の前に接する事が出来ました。7月にはホール内に南洋情緒をみなぎらせ、椰子の木蔭にダンサーはフラを踊り、フロリダは好評に好評を重ねて参りました。

津田の文章中に「アマチュア選手権大会を催し」とある。ダンス競技会の発展のきっかけをつくったものとして注目される。この頃の競技会のようすを玉置真吉はこう語っている⁽²⁷⁾。

「競技会が始まったのは私がフロリダにいた時分で、このとき優勝したのが農林省のお役人だった青木直さんでした。けれども今から考えますと、いろいろナンセンスなことがありました。何しろ選手の数といっても限られておりましたし、それに主催する団体が分立したものですから、1つの競技会にせいぜい7、8名の出場者しかなく、6等まで賞品を用意したのにたった3人しか出なかつたり、その上に箔をつけるため、どの競技会もきまって××選手権大会と称えたものですから、同じ年度の全日本選手権保持者が5名も6名もできて、それが又ある競技会で顔があつて、全日本のまた全日本選手権を争ったりする妙なこともありました。……(中略)……それでも競技会が盛んになったことがいい刺激となって、技術を研究しようとする機運がもりあがつたことは、言いようによっては、いまのダンス技術の母体をきずいたものとして重要な意味があると思います。」

1932年(昭和7)8月6日午前4時30分、フロリダは出火で全焼した。しかし、津田は、ただちに復興の計画を立て、わずか50数日の間に、新生フロリダが誕生することになった。こんどのフロリダの建物の特徴はスカイドームによく示されている。すなわち天井を天空に型どり、星座を現わし、多数の豆電球を配し、コバルト色に塗られたこの天井に調光器によって、随時、星のきらめく夜空を表現できるようにした。ワルツの時などは、周辺の光度を低くし星空の下で踊っている雰囲気

をつくった。閉場まじかには、「グッド・ナイト・スイート・ハート」が演奏されたりした⁽²⁸⁾。

(2) 社交ダンスの風俗と文化

社交ダンスを教えることが一つの職業として確立するのは、1929年(昭和4)頃とみられる。当時、社交ダンス教師の一人であった池田三郎は、技芸師第六等の鑑札を受けて、いわゆる「遊芸師匠」として教えることになった経過を記録にとどめている。また、当時をふりかえってこうも書き記している。「男女間の自由の交際を、僅かダンスによって白眼視裡に求めていた時代であります。官憲の圧迫、群衆の無理解、そうして生活苦等が次々に追憶され、感慨無量であります⁽²⁹⁾」。

ダンスホールには内部に教授部などが設けられて、ダンスを教えていた。たとえば1931年(昭和6)当時の阪神国道の長州にあったパレスの場内掲示場にはこう書いてある⁽³⁰⁾。

教授部規定

クイックステップ	5日間	5円也
スロートロット	〃	〃
ワルツ	〃	〃
タンゴ	〃	〃

速成教授御相談に応ず、初心者歓迎

この当時、タンゴ(コンチネンタルタンゴ)はだんだん踊られるようになっていた。タンゴが流行した頂点は1935年(昭和10)頃で、その後は下降線をたどった。

さて、現在の「ダンスと音楽」誌(月刊)の前身、「ザ・モダン・ダンス」誌(月刊)が社交ダンスとダンス音楽の指導・啓蒙のために創刊されたのは1932年(昭和7)春であった⁽³¹⁾。

作家として有名になるまでの数年間、石川達三は、舞踏雑誌の編集をしたり、みずからもダンスの教師になってしばらく生活したことがある。「ザ・モダン・ダンス」の創刊以来、昭和9年1月号までの巻尾の「発行兼編集者」名は石川達三となっている。また、石川はこのころ教師協会にも所属し、新宿の帝都舞踏場で行なわれた同協会主催のデモンストレーションにも出演している。彼はまた、当時銀座三原橋際にあったシブレイ・ダンスホールのダンス教師でもあった。当時、「ザ・モダン・ダンス」の実質的な編集長であった藤村浩作は、石川のおかれた状況について「当時のダンス界では石川氏はキャリアも浅く、あまりめぐまれた存在ではなかった」と述懐している⁽³²⁾。

1931年(昭和6)当時の横浜のダンスホールの実態を示す調査資料がある⁽³³⁾。社会学者・今和次郎の総括のもとに写実的手法で集められたものである。それによると、当時横浜には六つのダンスホールと四つのダンス教習所

があった。ダンスホールは、横浜ダンスホール、カルトンダンスホール、ブルーバードダンスホール、太平洋舞踏場、メトロポリタンダンスホール、インターナショナルダンスホールである。また、ダンス教習所としては、チェリー、オリエント、アマチュア、ソシアルがあった。以上の施設のうち、調査は、横浜ダンスホール、カルトンダンスホール、ブルーバードダンスホールの3カ所について行なわれている。図2は、そのうちの一つを示している。それには以下の説明が付されている。

「横浜ダンスホール

1931・9・13晴、日曜日 后9時より9時30分に亘る調査。

図に見る通り50尺の70尺(以上目測)の横浜最大のフロアを持ったホールですが最近ダンサーのストライキがあったとかでダンサーは僅か(ホールの大きさに較べて)14人(洋服12人・和服2人)、椅子は34脚ありますが、客は計34人(婦人客和服2人・男客32人——其の内外人が2人と支那人が1人——1人の和服を除いては全部洋服です)と言うカンサンな状態です。テケツ(注・チケット)1枚に付ダンサーの手取りは5銭の8銭です。4面に依るホールの上に引かれた曲線は舞踏中の者のシートを示すものです」。

また東京に目を移そう。フロリダが発足して間もないころのダンスホールでの飲食やチケット券等について、さきの玉置はつぎのように実態を話している。

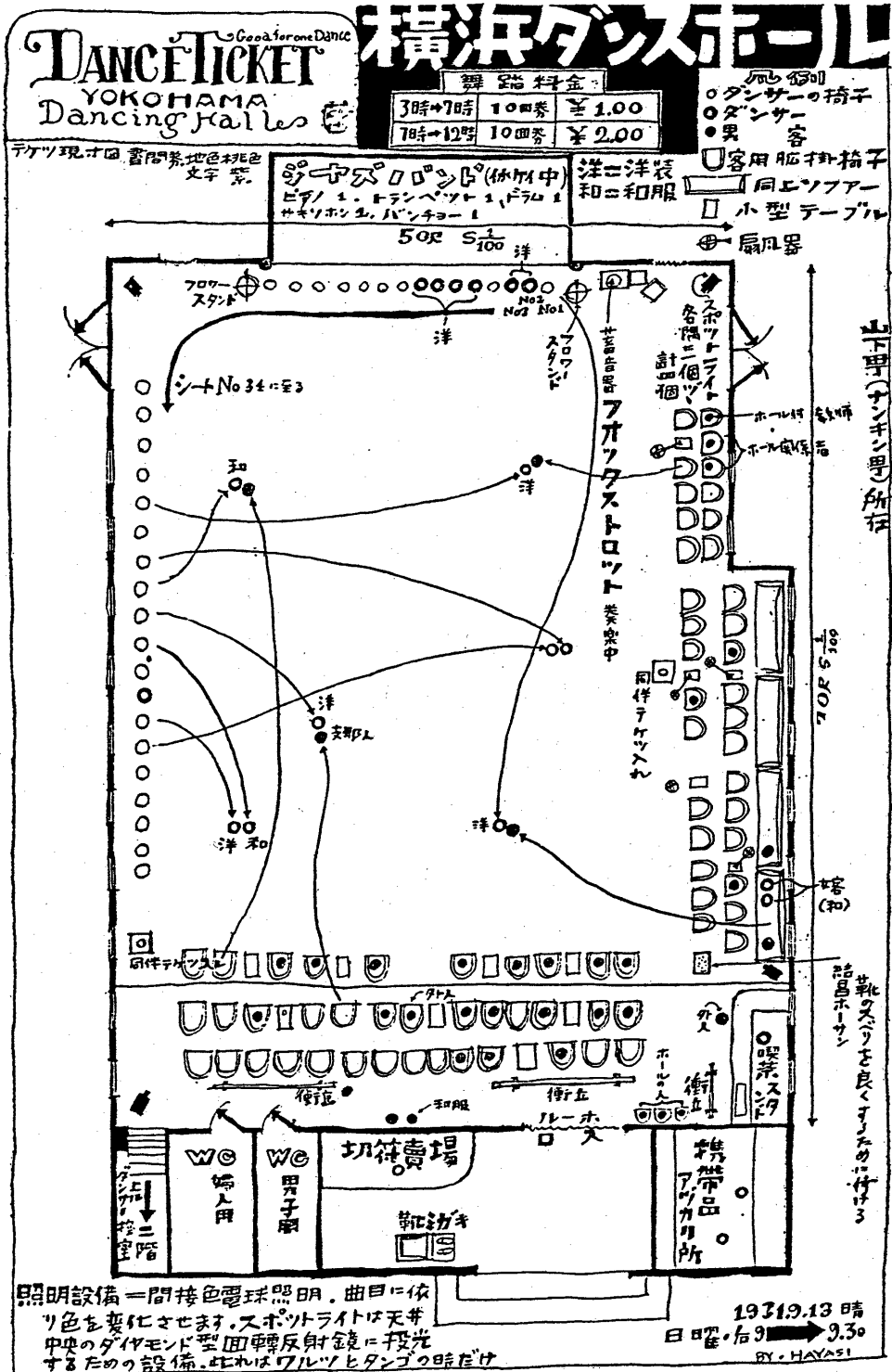
「当時のダンスホールは、本当にダンス好きな人達ばかりが集まっていましたね。東京ではアルコール類は一切禁じられていましたし、したがって酔っぱらいは入れて貰えないのです。なかで出されるものは紅茶とかコーヒーにお菓子ていどで、それも客だけに限られ、ダンサーの同席などは思いもつかないことでした。チケットは、ホールごとに体裁はいろいろでしたが、大抵10枚つづりが普通2円から2円50銭が相場でした。1曲1枚のチケットで、ダンサーの収入が6銭から8銭ぐらいになったでしょうかね。ダンサーもいろいろ苦勞が多かったようです」。

東京のユニオン等で客として踊っていたあるダンス愛好者の雑誌投稿によると、当時はあって戦後みかけなくなった備品として、つぎのものなどがあげられている⁽³⁴⁾。おしぼりタオル(無料)、ダンサーのチケット成績による席順、曲目のサインランプ(タンゴが赤、ワルツが青、トロットが白)、同伴者用のチケット投入函、客の住所姓名記入帳(ダンス禁止令の直前)。

(3) ダンスホールの閉鎖

1935年頃まではダンスホールに自由な雰囲気があった

図2 横浜ダンスホールの一夜



が、日中戦争が起こるにおよんで、社交ダンスを欧米の享楽主義として排斥する動きがでてきた。治安行政もこれに呼応した。1938年（昭和13）7月、東京市警視庁は、管内のダンスホール責任者を呼び出して新たな規制事項を申し渡した。その内容の主なところはつぎのとおりである⁽⁶⁵⁾。

- ダンスホール並びに舞踏教授所に婦人客、学生生徒、未成年者の入場を禁ずる。
- ダンスホールに入場する際は、住所、氏名、職業を必ず記帳しなければならない。
- ホールは教授所以外の場所で、舞踏会を開いたり、舞踏を教えることはできない。
- ダンサー、教師、楽士らは、客と同伴外出してはならない。

1940年（昭和15）になると、ダンスホールの入口にしばしば警官が立って、入場しようとする客の身分をあらためた。そして1940年10月31日を期して、都内の全部のダンスホールに閉鎖令が出され、おってこの規制は全国におよんだ。外地の満州や上海でも日本人経営のダンスホールはまもなく内地と同様の規制を受けることになった⁽⁶⁶⁾。

1940年閉鎖当時のダンスホール名はつぎのとおりである⁽⁶⁷⁾。

〔国内〕東京：新橋、フロリダ、銀座、国華、日米、ユニオン、和泉橋、帝都。神奈川県：金港、太平洋、フロリダ、オリエンタル、メトロ、カールトン、花月園、東横、川崎。埼玉県：シャン・クレール、バル・タバラン、エル・キャピタン。千葉県：千葉。静岡県：熱海。群馬県：東山荘。新潟県：イタリア軒、孔雀。石川県：金沢。兵庫県：花隈、キャピトール、ダイヤ、ソシャル、西宮、ガーデン、尼ヶ崎、キング、パレス、タイガー、宝塚、鈴蘭台。滋賀県：東山、桂、京阪、琵琶湖。奈良県：生駒。大分県：亀井、オリムピック、ビリケン、パレス。

〔海外〕台北：羽衣会館、同声クラブ。大連：大連会館、大連、ペロケ、メリー、快樂、西檢、金星、遼東ホテル。奉天：明星、ブロードウェイ、スター、奉天会館、みどり。新京：扇芳会館、キャピタル、新京会館。ハルビン：フロリダ、明星、セントラル、花の御所、ファンタジヤ。鞍山：オリオン。吉林：白山会館。チチハル：チチハル。青島：スター、ダッキー、マウント・フジ、プランタン、プリンス、キング、ムーンライト。天津：金船会館。北京：金扇。上海：ブルーバード、桃山。

(4)東京の八大ダンスホール

1940年の閉鎖当時、東京にはダンスホール8、ダンス教室所が21あった。いわゆる八大ダンスホールのプロフィールをさいごに挙げておこう。以下のダンスホールの

紹介は戦前からのダンスホールにくわしい伊志原茂里による⁽⁶⁸⁾。

フロリダ（赤坂溜池）

夜は淋しいあの溜池に思わぬジャズの音がひびく。このホールは何といっても津田又太郎氏のスマートな経営で八大ホールを代表していた。ホールの設備も、バンドも、客種も他のホールで味わえぬ雰囲気だった。外人のバンドをアチラから直接招聘したりして、諸外国の外交官なども多く来ていたようだった。このホールのダンサーは他のホールより、背の高い外人向のスマートなのが揃っていた。ホール全体が上品な点も客種が良い証拠だった。

新橋（芝口交差点、当時大田屋ビル階上）

このホールは麴町九段下のデパートの2階にあった九段ダンスホールから移って来た。あまり広くはないが見物席とバンドが2階にあり、ホール向きに設計しただけあって申し分なかった。ここではよく不良の縄張り争いがあったて血なまぐさい騒ぎを起こしたのがキズだった。銀座へ出たダンスマンの素通りのできないホールだった。

銀座（京橋交差点角、当時星製薬ビル6階）

銀座三原橋際の倉庫の2階にあった、シプレー・ダンス・ホールが移って来た大衆向きのホールで、チケットもランチ・タイムが5銭、ヒル券10銭、夜券20銭で、オープン当時はホールの真中に、廻り舞台式のバンドステージがあったのが物珍らしかった。ここのファンは銀ブラ連中と、銀座辺りのカフェーの女給さんが昼間よく遊びに来ていた。

帝都（新宿帝都座5階）

一番おそくできたので、場内の設備も良かったが入口が裏の細い楽屋裏からエレベーターで上る感じが悪かった。お客は山の手随一とて、会社員が多かった。

日米（八重州口、旧日米信託ビル）

他のホールに比べて少し小さいけれど、場所柄重役級の上品な客が多く、正しいエチケットを、ある程度守って踊っているのも一つの倶楽部のような感じがあった。

国華（京橋八丁堀）

大衆向ホールで、ランチ・タイム5銭、ヒルは10銭、夜券16銭であった。ヒルは付近の株屋さん連中のお客でしめていた。

ユニオン（人形町松竹映画劇場4階、当時日鮮館ビル）

このホールが昭和3年4月大阪のユニオンから移って来た時、人形町界隈の町内から相当反対の声があったが、当時の支配人藤村浩作氏がよくねばり、とうとうものにして終った。

株式取引所と問屋街が近くにあるので、番頭さん風の粹な人や、芸者さんや、半玉や御座敷帰りの客が見物に

よく来ていた。和服で踊っている客の数はこのホールが一番多かった。

和泉橋 (神田岩本町交差点)

このホールは飯田町ダンス・ホールが狭くなったので、発展的に移って来たもので、場所柄学生が多く、時節柄制服がやかましいので着だけ背広に着替えて踊りに来ていた学生ファンで相当賑った。当時制服を断り、ネクタイ無しを断り、エチケットをやかましく言ったのでホールの近所で洋服を貸す店さえできた程だ。全くウソのような事実である。退役海軍主計大佐が経営者であった事も当時の状況下では異色だった。昭和13年、元ユニオンの支配人藤村氏の経営に移り、15年、ホールが全面的に閉鎖になってから、藤村氏は同ホールを約3倍に拡張し、洋式の興亜ホテルとして翌年秋更正させた。

むすびにかえて——今後の予定——

次に予定されているノート(第2章)では、今回のノートに収録した資料とそれに対する解釈の補遺をおこなった上で主として、「戦後の日本における社交ダンスの展開」をまとめた。そこでふられる内容の主なもの、戦後のダンスホール、キャバレー、ナイトクラブなどの営業形態、ダンスの種目とダンス音楽の種目の動向、ダンスの風俗、ダンサーの生活、ダンスに関連する団体・組織のしくみとその活動過程、競技会の実施状況、地方都市のダンスの普及過程と活動状況、警察当局の風俗・風紀取締の動向、ダンスに関する雑誌、本の刊行やテレビなどのマス・コミの対応、職場でのダンスサークルの活動状況、学生ダンスクラブの活動状況などである。

次の次(第3章以降)に予定されているノートでは、明治・大正・昭和期の全体をつうじて社交ダンスの社会史・文化史に影響の大きかった人物群像に焦点をあてて、彼らの活動を追うことで、近代日本の社交ダンス文化をつくりあげていったものが何なのか、発展をささえたエートの構造はどんなものだったかを明らかにしたい。

さしあたり次回について、ノートに記されるはずの内容の骨子を記しておく。

(1)戦後の社交ダンス愛好者の広がり

- ①敗戦後、大宮、浦和、川口、ついで東京でいち早くダンスホールがあらわれた。
- ②1948年(昭和23)、風俗営業取締法が制定された。そこで規制される風俗営業は全部で7種。その一種であるダンスホール(客にダンスをさせる(接待、飲食ナシ))も規制の対象になった。
- ③ダンス専門のダンスホールは減り、キャバレーや同伴

でたのしむナイトクラブ形式の営業が実際にふえた。一方、競技ダンスの分野で人口の増加がみられた。

④1950年、日本舞踏競技連盟発足。各地で競技会が開催されるようになった。1969年、諸外国の選手を招聘して、東京で世界選手権大会が開かれた。1977年、日本アマチュアダンス協会が発足した。

(2)学生ダンスの世界

①1948年(昭和23)早慶戦開催。1955年、東京六大学戦(於フロリダ)。1956年、第1回全日本戦。そして1958年には、全日本学生舞踏競技連盟が発足した。1972年、全日本戦にラテン種目(ルンバ、チャチャチャ)を採用した。

②1956年(昭和31)、全日本戦出場校は、東部8校、関西2校(計10校)であった。1961年、第6回全日本戦(於新宿体育館)、フル・メンバー8組が出場、全体で14校が出場。1971年、第16回全日本戦(於日大講堂)フル・メンバー26組出場、全体で54校出場。1983年、第28回全日本戦(於後楽園ホール)、フル・メンバー43組、全体で64校の出場にまでなった。

③1980年現在、全日本学生舞踏連盟の加盟校数は次のとおりである。北海道8(加盟人数100人)、東北10(128人)、東部95(1677人)、中部12(268人)、関西23(260人)、九州20(232人)、合計168校(2671人)。

注

- (1)仲村祥一編『現代娯楽の構造』文和書房、1973年、302ページ。
- (2)仲村『前掲書』301ページ。
- (3)『ダンスと音楽』1957年5月号、ダンスと音楽社、17ページ、27ページ。および同誌1957年8月号、4～7ページ。
- (4)この頃、上層階級の令嬢たちの必須の習いものには、洋服と舞踏が入っていた。洋服は、鹿鳴館の夜会で流行していた、後腰をふくらませた「バックスル・スタイル」が特徴であった。
- (5)『歴史への招待』1980年、日本放送出版協会、54ページ。磯田光一『鹿鳴館の系譜』1983年、文藝春秋、307ページ。
- (6)この頃の夜会のようにすは三島由紀夫の戯曲『鹿鳴館』や芥川龍之助の短編小説『舞踏会』に生き生きと描かれている。
- (7)「社交ダンス」とともに「ボールルーム・ダンス」の用語もつかわれた。しかし、一步立ち入ると、両者をほぼ同様の意味で、ともに社交と娯楽を目的としたものだとする理解と、本来社交ダンスだったものが、技術

の複雑さを増し、鑑賞の要素が加わるとボールルーム・ダンスと呼ばれるようになるとする理解とに分かれる。『ダンスと音楽』1950年9月号34ページ、1950年11月号39ページ。

(8)『ダンスと音楽』1957年8月号12ページ。同誌1961年9月号24ページ。

(9)井田はその後、花月園を去り、1919年より1921年までアメリカ航路の天洋丸に乗り込み、バンドマン(「楽士」)として働いた。そこでダンス音楽の演奏法やジャズ音楽の手法の腕をみがいた。帰国後、パウリスタやユニオン等、当時新興のダンスホールに出演した。『ダンスと音楽』1957年8月号12ページ～14ページ。

(10)瀬川昌久『舶来音楽芸能史・ジャズで踊って』サイマル出版会、1983年、85ページ～87ページ。

(11)『ダンスと音楽』1954年3月号、48ページ。

(12)『ダンスと音楽』1953年4月号、38ページ～40ページ。

(13)瀬川昌久、前掲書、88～89ページ。

(14)『ダンスと音楽』1953年4月号、40ページ。

(15)『ダンスと音楽』1953年4月号、38ページ。

(16)瀬川昌久、前掲書、94ページ。

(17)『ダンスと音楽』1953年8月号28～31ページ。

(18)瀬川昌久、前掲書、96ページ。

(19)『ダンスと音楽』1953年10月号16～17ページ。

(20)『ダンスと音楽』1953年10月号15ページ、瀬川昌久、前掲書、96～97ページ。

(21)瀬川昌久、前掲書、99～100ページ。

(22)瀬川昌久、前掲書、100ページ。

(23)瀬川昌久、前掲書、103ページ。

(24)目賀田綱美は、1896年(明治29)生まれ。1920年、25歳の時、パリに留学し、数年間住みついた。当時一流と目されたバラデュークの門を叩いてダンスを習った。ロンドンにも3回ほど出かけ、フォックストロットを習得した。日本の社交ダンスの草分け的存在。

(25)『ダンスと音楽』1956年4月号16～17ページ。

(26)1932年(昭和7)フロリダ火災後の新装開店時のパンフレットに「『フロリダ』を語る」と題してしたためた

もの。

(27)玉置真吉(談)「ダンスと歩いたこの50年」『1957年サンケイ杯争奪・全日本選抜舞踏選手権大会』プログラム、神奈川県社交舞踏師協会、16ページ。

(28)『ダンスと音楽』1956年4月号、18ページ。

(29)『ダンスと音楽』1951年5月号、15ページ。

(30)『ダンスと音楽』1954年2月号、28ページ。

(31)戦争による時代の重圧で、1940(昭和15)8月に廃刊になり、敗戦後の1949年(昭和24)7月に復刊された。1950年3月に現在の『ダンスと音楽』に改題。1949年7月号70円、1951年4月号80円、1959年1月号100円、1960年1月号120円、1963年1月号130円、1965年1月号、160円と定価が改訂されていった。

(32)『ダンスと音楽』1961年9月号、15ページ。なお、石川は『ザ・モダン・ダンス』誌に、長江卓三のペンネームで、ダンス教師をテーマにした短編『都会の女』をしたためている。

(33)今和次郎、吉田謙吉編著『考現学採集(モデルノロチオ)』建設社、1931年、93～100ページ。

(34)『ダンスと音楽』1949年10月号、23ページ。

(35)瀬川昌久、前掲書、309ページ。

(36)瀬川昌久、前掲書、310ページ。

(37)玉置真吉、前掲誌、16ページ。

(38)『ダンスと音楽』1949年7月号、17～19ページ。

* * *

このノートを作成するにあたって、日本舞踏競技連盟(NATD)会長・藤村浩作氏、「ダンスと音楽」編集部・田中正夫氏、田代清ダンス教室主任・菊地孝治氏の三先生からは貴重な資料を拝借し閲覧する便宜をいただきました。記して感謝いたします。

なお、本文中、歴史的記述の通例にしたがって、現在社交ダンス界その他で活躍になっておられる方々に対しても敬称を略させていただきます。